

くち  
口の坐禅

人が生まれたときには、実に口の中にはおの斧が生じている。

愚者は悪口を言つて、その斧によつて自分を斬り割さくのである。

(ブツダのことば 岩波文庫 中村元 訳 p146)

『三業さんごうに仏印ぶつちんを標し、三昧さんまい(||定たんじ)に端坐たんざ』

三業さんごう || 身口意しんくういの三業

仏印 || 身は結跏趺坐けつかふざ、口は黙し、意に是非善悪を思わないこと

(正法眼蔵 辨道話 岩波文庫 水野弥穂子 校注 p15)

・舌、上の顎あぎとを拄さえ息は鼻より通ず。唇齒しんし相著あいつけ……

・口辺くへん醜生ぼくじて臘月ろうげつの扇せんの如く、風鈴ふうれいの虚空こくうに懸かかつて

四方の風を問わざるが如くなるは、是道人の風標なり。

(坐禅用心記)